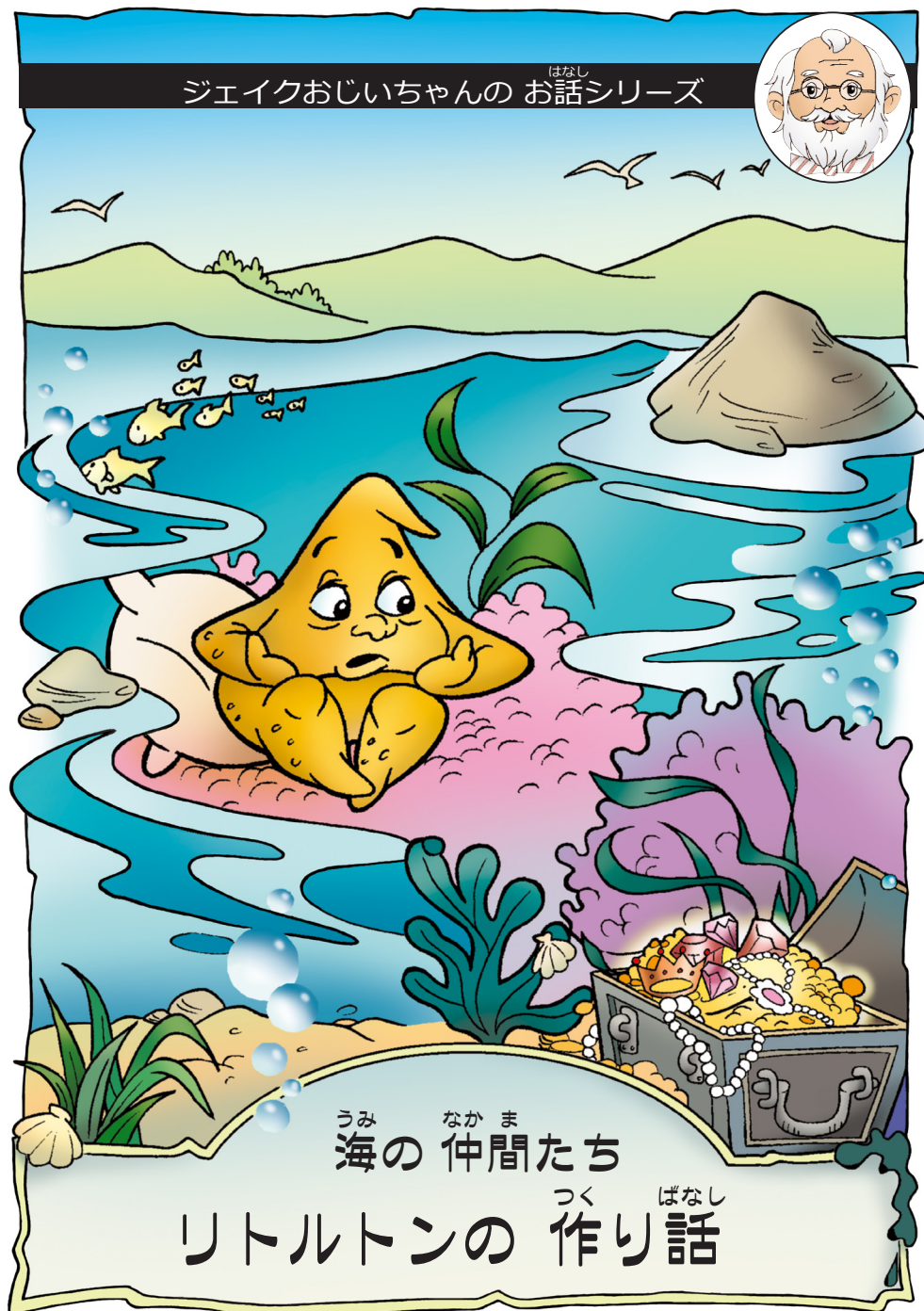




ある 日曜日^{にちようび}の 午後^{ごご}、トリスタンは、友だちの デリックと トロイと
シャンタルを 家^{いえ}に まねきました。

「みんな、仲良^{なかよ}く 遊^{あそ}んでるかい？」 4人^{よにん}が 遊^{あそ}んでいる 部屋^{へや}の
前^{まえ}を 通^{とお}りかかると、ジェイクおじいちゃんが たずねました。

「うん。」 おもちゃに 夢中^{むちゅう}に なりながら、みんなが いっせいに
こた 答えました。

すると、シャンタルが たずねました。「ジェイクおじいちゃん。
トリスタンが 一番^{いちばん} 頭^{あたま}が いいって、本当^{ほんとう}？」

「どうしてそんな こと 言うんだい？」と、ジェイクおじいちゃんが
たずねました。

「トリスタンが、おじいちゃんが そう 言^いったって 言^いうから。」と、
シャンタル。



すると、トリスタンが ^い言いました。

「おじいちゃん、^{おぼ}覚えてる？

ぼくが ^{しゅくだい}宿題を ^{とき}した ^{こと}のこと。

すごく ^{むずかし}かかったけど、

^お終わった ^{とき}時は、

おじいちゃんが ^{ぼく}の ^{こと}、

ホントに ^{かしこ}賢いねって

^い言ったじゃない。

^{いちばん} ^{あたま}一番 ^い頭が ^{いい}って！」



「^{たし}確かに、^{おまえ}は ^{かしこ}賢いと

^い言ったね。だが、^{いちばん} ^{あたま}一番 ^い頭が

^{いい}と ^い言った ^{おぼ}覚えは ^{ない}なあ。」

ひげを ^{なで}ながら、

ジェイクおじいちゃんが ^い言いました。

「^{じぶん}自分の ^{こと}を ^{よく} ^{おも}思いたい ^{こと}は ^{ある}ものだ。その方が、

^{まわ}周りから ^す好かれると ^{おも}思ってね。だが、^{とも}友だち ^{という}のはな、

あるがままの ^{じぶん}自分を ^す好きに ^なってくれる ^{もの}なんだ。」と、

ジェイクおじいちゃんが ^い言いました。

「昔々、^{とも}友だちに ^き気に入られる ^{ため}には、^{じぶん}自分が ^{なに}何か

^{とくべつ}特別な ^{もの}に ^{なら}なければ ^{なら}ないと ^{おも}思った ^{ひと}デが ^{いた}。」

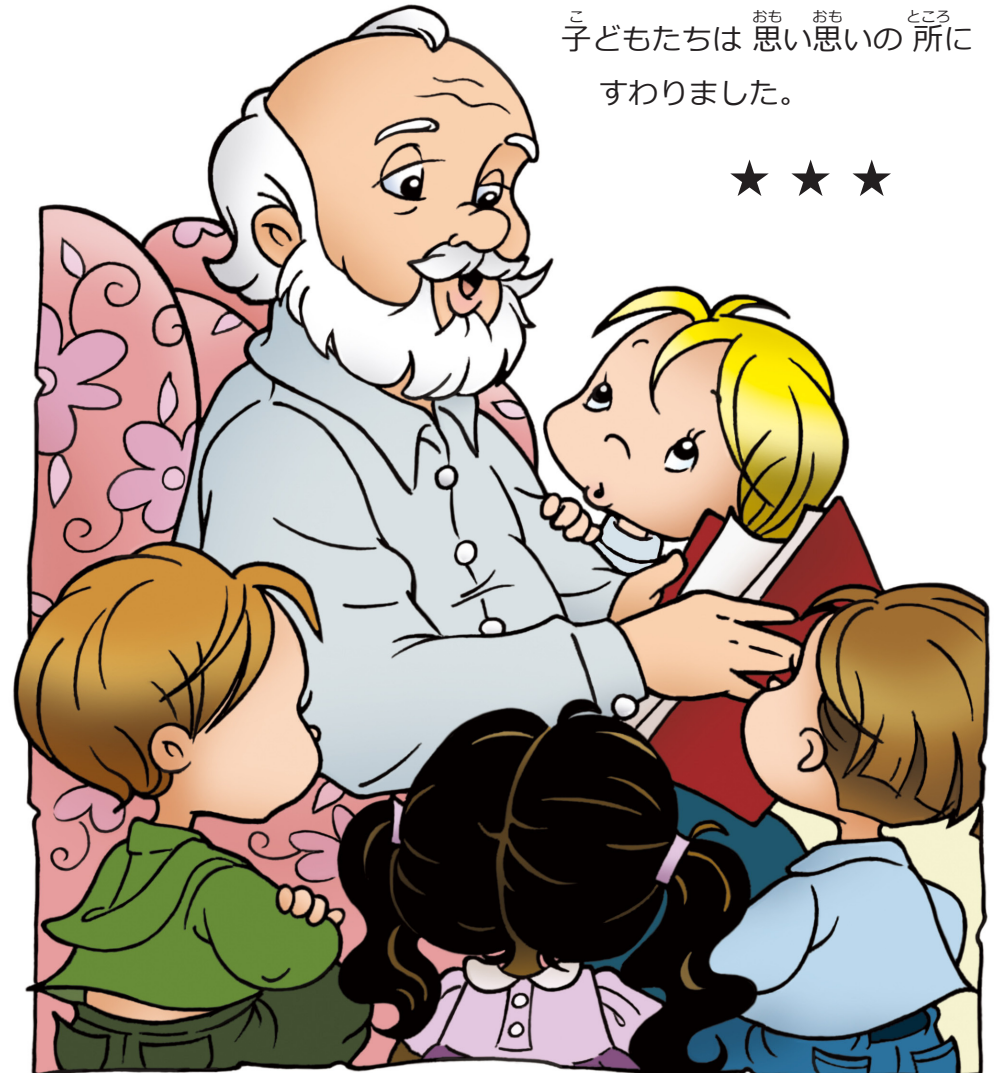
「おじいちゃん、その ^{はなし}お話を ^{して}！」 ^こ子どもたちが ^{くち}口を

^いそろえて ^い言いました。

ジェイクおじいちゃんが ^{はなし}お話の ^{ほん}本を ^と取りに ^い行っている ^{あいだ}間、
トリスタンとデリックとトロイとシャンタルは、おもちゃを ^{もと}元にもどしてリビングルームを ^ききちんと ^{かたづ}片付けました。

「みんな、^き聞きやすい ^{ばしょ}場所を ^み見つけたかい？」と、おじいちゃん。

「うん。」 そう ^い言って、
^こ子どもたちは ^{おも}思い^{おも}思いの ^{ところ}所に
すわりました。





「お母さんから、この詩を教わったんだ。いつもこの詩を暗唱しながらぼくをねかしつけてくれてね。」と、シャロが言いました。

「とってもすてきな詩だね。」 ヒトデの友だちのリトルトンが言いました。

ふたりは岩にすわって、がけに波が当たってはくだけ散る音を聞きながら、空にかがやく星をながめていました。



「ぼくって、昔は星だったんだよ。」と、リトルトンがじまんしました。

「星になりたかったっていうことかい？」と、シャロがたずねました。

「ちがうよ。昔は星だったんだ！」と、リトルトンが声を上げました。

「じゃあ、何が起こったのかい？ 話してよ！」

「ああ……。ええっと……。」

リトルンは言葉につまって
しまいました。リトルンは、
シャロに自分をよく

印象付けたいだけだったので、

何と答えていいかわかりません。

作り話をすべきなのか、それとも

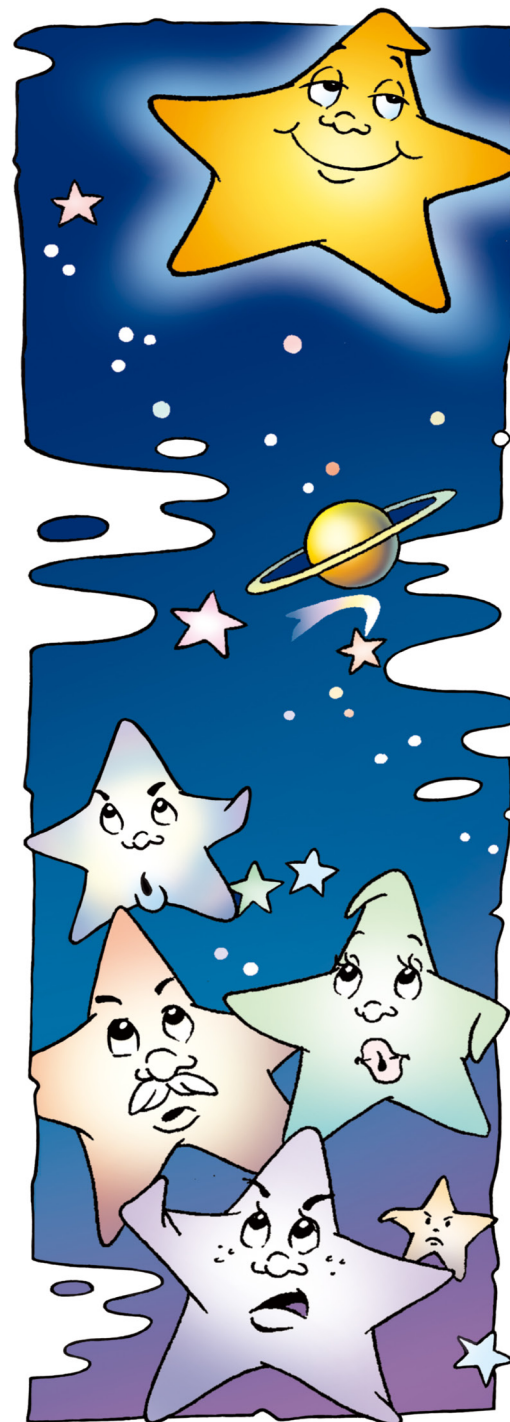
本当のことを言うべきなのでしょうか？



リトルンは思いました。(今シャロに本当のことを話したら、
きらわれちゃうだろうなあ。ぼくは何のとりえもない、ただの
みにくいヒトデにすぎないし、もう友だちでいたくなくなるかも。)

「ねえ、話してくれるの？」と、シャロがたずねました。

「君に出会う前の話なんだけどね。」と、リトルンは話し
始めました。「ぼくは昔、遠い遠い空の星だったんだ。それも、
ただの星じゃなかったんだよ。色とりどりの星だったんだ。白く
かがやくこともあったけど、青や赤や黄色や緑色にかがやく
こともできたんだ。」



「うわあ！すごいね！
それで？」シャロが声を
上げました。

「ぼくみたいに色を
変えられない星は、ぼくが
うらやましくて、ねたんなんだ。
だから集まって、ぼくを
どうやって追い出したら
いいか、相談したんだ。」

「それはひどい話だね。」
と、シャロ。

「ある日、ぼくがいつもの
ようにかがやいていると、
彼らがやって来て、ぼくを
空からたたき落としたんだ。
いきなり、ぼくに体当たり
したんだよ！ぼくは
バランスを失って、空から
落ち始めた。ぐるぐる
回りながら、落ちたんだ。
ものすごくこわかったよ！
そして、長いこと落下した
後、ついにザブーンと海に
落ちて、海底にしずんだんだ。」

「何が起きたのか、やっと
わかって、自分を 見てみたら、
ぼくはもう、明るく 色とりどりに
かがやく 星じゃ なかった。
ただの さえない 地味な
ヒトデになっていたんだ。
それ以来、ぼくは ヒトデで
いるという わけさ。」

「悲しい 話だね。だけど、
君が 昔のような 星で なくても、
さえないとか 地味だとか、
ぜんぜん 思わないよ。ぼくは
いつも、あるがままの 君が
好きなんだから。君に 起こった
ことは 残念だけれどね。」

「心配しなくても
だいじょうぶ。ぼくは もう、
ヒトデで いる ことには なれた
からね。」と、リトルトンが
言いました。

その夜、リトルトンは
サンゴの ベッドに 横たわり
ながら、何かが まちがって
いるなあと 感じていました。



（シャロに、こんな 作り話を するべきじゃ なかったよ。本当の
ことじゃ ないのに。だけど、信じちゃってる。もし、シャロが 他の
だれかに 話したら、大変だ。どうしよう？）

「・・・それで、意地悪な 星たちは、かわいそうな リトルトンに
体当たり して、リトルトンは 空から 落下し 始めたんだ。」
シャロは、この 話を バダーじいさんと ゴビーに 話していました。

「そして、リトルトンが 海に 落ちた 時、リトルトンは もう 星じゃ
なかった！ ヒトデになっていたんだ。」 そう 言って、シャロは
話を しめくくりました。

ゴビーは バダーじいさんの方を 見て、頭を 横に ふりました。
「お母さんから 教わった 話では、ヒトデは ヒトデだって。昔は
星だったなんて 話、聞いた ことが ないよ。」

「そうだな。」と、バダーじいさんも 言いました。

「じゃあ、自分で リトルトンに
聞いてごらんよ。」と、シャロ。

それで、みんなで
リトルトンを さがしに
行きました。



「ああ、そこにいたんだね。」 リトルトンを見つけると、
シャロが言いました。

「あ、やあ。」と、リトルトン。

「シャロから君の話を聞いたよ。それで、その話が本当なのか、
聞きたかったんじゃ。わしらはずっと、ヒトデはわしらと同じく、
海の生き物だって教わっておったからのう。」と、バダーじいさんが
言いました。

「ぼ、ぼく・・・」 リトルトンは言葉に
つまりました。落ち着かない様子です。

「君がそう話してくれたんだよね。
本当だって言ってよ。」と、シャロ。

(どうしよう?)

リトルトンはあわてました。

(作り話だって言うべきかな?)

それとも、本当の話だって
言うべきかな?



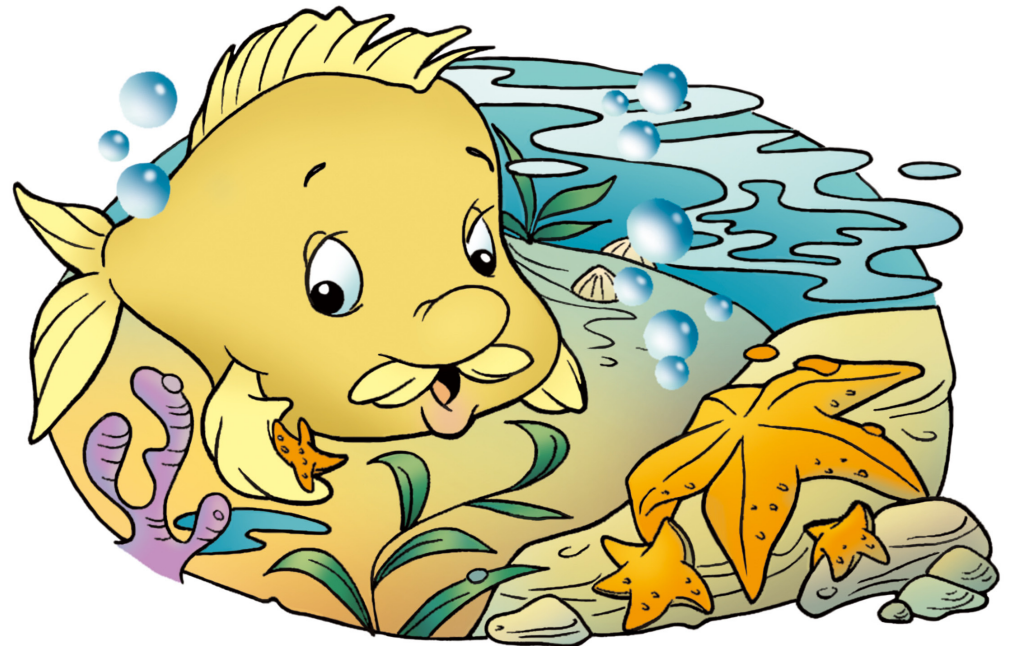
そんなウソは言うべきじゃなかった。もう、ぼくが言うことは
何も信じてもらえなくなるかもしれない。)

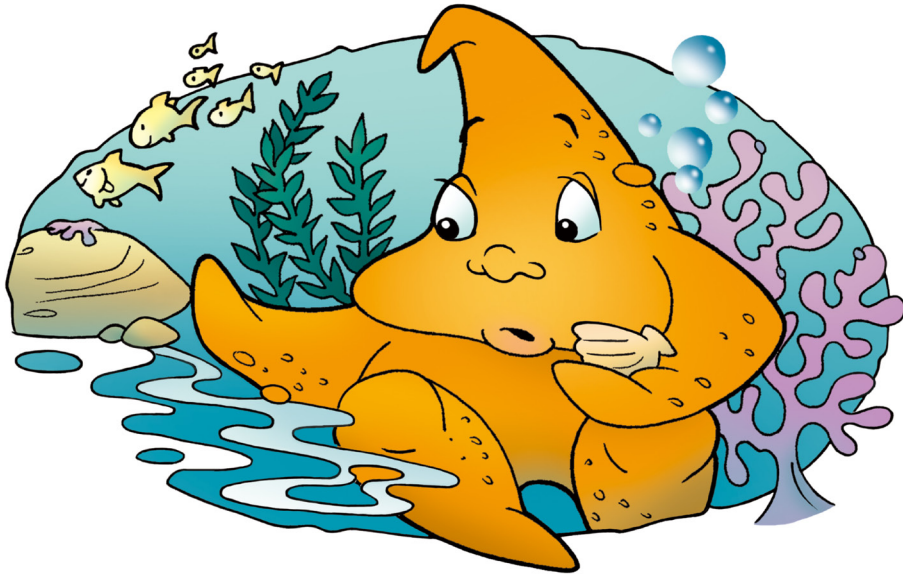
ちょっと考えてみましたが、リトルトンは、どうすべきか分かって
いました。

「シャロ、ごめんね。」

「どういうこと?」と、シャロがたずねました。

「ぼく、星だったことなんて、ないんだ。ずっと、ヒトデの
ままだよ。自分が特別だって思ったこともないし。ぼくの色は
明るくもないし、魚たちみたいにゆうがに泳ぐこともできない。
だけど、何か特別なものがあるって、思ってたんだ。
そうしたら、ぼくのこともっと気に入ってくれるかもしれないと
思ってた。」





「だけど、ぼくはもう、君のことは好きだよ！ ぼくたちはもう、友だちじゃないか。大切なのは、それだけさ。」と、シャロが声を上げました。

「本当に？」 びっくりしたリトルトンがたずねました。

「もちろん本当さ。君の色や、どんなふうにお泳ぐかなんて、だれが気にするかい？ 君のあるがままが、好きなんだ。」

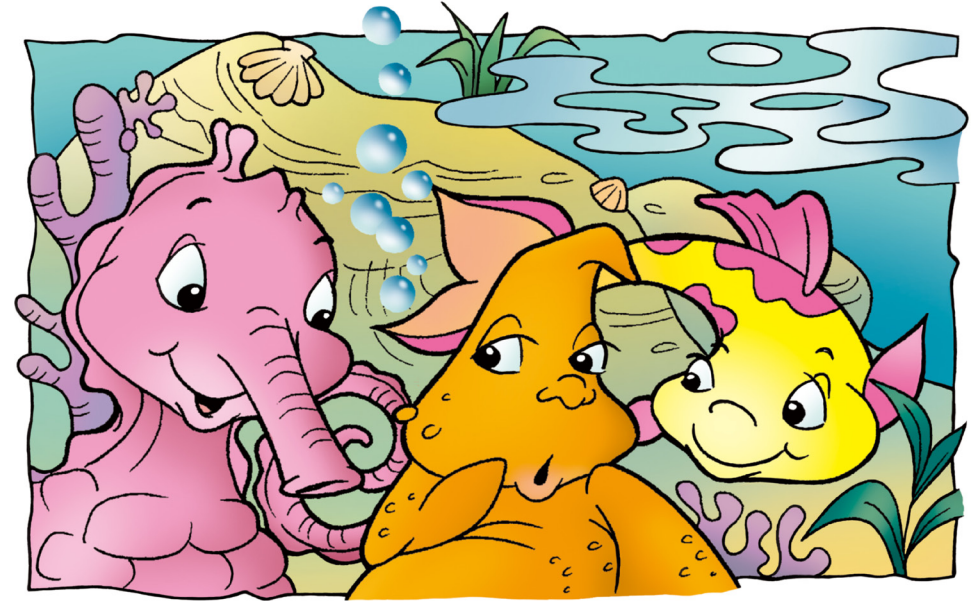
「ぼくたちだって。」と、ゴビーも言いました。

「われらはみんな、ちがう生き物じゃ。それぞれちがう所があるからこそ、みんなが特別なんじゃ。」と、バダーじいさんが言いました。

「本当にその通りだね。」と、リトルトン。「ごめんね。もう、こんな作り話はしないって、約束するよ。君たちみたいな友だちがいて、本当にうれしいよ。」

「ぼくたちも、君が友だちで、うれしいよ。」 ゴビーとバダーじいさんとシャロも、口をそろえて言いました。

みんなはおたがいがあることをうれしく思いながら、いっしょにお泳いで行きました。



ピンポン！

「君たちのお母さんたちがおむかえにきたようだね。」 本を閉じながら、ジェイクおじいちゃんが言いました。

「おじいちゃん、お話をしてくれて、ありがとう。」と、デリックが言いました。

「お話から、いつもたくさんのことを学んでいるよ。」と、トロイも言いました。

「わたしも。」と、シャンタル。

「それはうれしいね。わしも、
きみ^{はなし}たちにお話を^{はなし}してあげるのが
たの^{たし}しみだよ。確かに、お話を^{はなし}
たくさん^{まな}のことが^い学べるね。」と、
ジェイクおじいちゃんも^い言いました。

「この^{はなし}お話、わすれないよ。
あるがままの^きぼくを^い気に入って
くれる^{とも}友だちがいて、^いぼくも
うれしいよ。」と、トリスタン。

「その^{とお}通りだね。」
おじいちゃんがトリスタンの
かみの毛を^けクシャクシャと
なでながら^い言いました。

「さあさ、お母さんたちを^{かあ}
待たせては^まいけないよ。
また^いすぐにおいで！」

「じゃね！」 デリックと
シャンタルとトロイが^{くち}口を
そろえて^い言いました。



ひとり ひとり
一人一人は
ちがうけれど、
かみさま
神様は

わたしたちの
ひとり ひとり
一人一人を みんな、
とくべつ そんな
特別な 存在として 造って
くださったんだ。